C-1

「それも」構文の省略分析

大久保 弥 (東京外国語大学)
okubo.wataru.m0@tufs.ac.jp

要旨

接続表現ソレモにより断片的な構成素 (残留詞) が導入される構文をソレモ構文と呼ぶ。ソレモ構文は、残留詞が先行節の事象あるいは先行節で導入された事物を修飾する用法を持つ。本稿では、ソレモ構文の統語的性質を明らかにし、ソレモ構文は節削除を含む省略構文として分析できると提案する。日本語の節削除を含む省略構文の分析を援用し、ソレモ構文はノダ文を基底構造として持ち、統語的派生の違いによって 2 種類の表層形が得られると主張する。一つは分裂文への派生と前提句の削除を伴う場合であり、もう一つは動詞の主要部移動による C への残留と TP 削除を伴う場合である。その上で、他の主要な省略構文と省略の認可要件を比較する。また、談話構造の観点から、ソレモ構文の適切性を検討する。最後に、他分野に跨るソレモ構文の課題を提示する。

1 「それも」構文の研究

(1–2) のような文をソレモ構文と呼ぶ。ソレモ構文には、二つの用法が認められる。一つは、先行節で導入された事物を修飾する**事物修飾**である。(1) では、先行節の「ペット」が指すものにより詳しい情報が与えられる。

(1) 事物修飾 太郎は**ペット** $_{\mathbf{i}}$ **を**飼っている。**それも** {a. **爬虫類のペット** $_{\mathbf{i}}$ **を** / b. **カメレオン** $_{\mathbf{i}}$ **を**}。
(命題的意味: 太郎は {爬虫類のペットを / カメレオンを} を飼っている。)

もう一つは、先行節の事象を修飾する**事象修飾**である。(2) では、先行節の示す「太郎がペットを飼っている」という事象についてその場所や期間の情報が与えられる。

(2) 事象修飾 太郎はペットを飼っている。**それも** {a. **研究室で** / b. **去年の夏から**}。
(命題的意味: 太郎は {研究室で / 去年の夏から} ペットを飼っている。)

ソレモ構文の構成要素は (3) のようにモデル化できる。ソレモ節は先行節を必要とする。事物修飾では、ソレモ節内の断片的構成素である残留詞は、先行節内に同じ文法的役割を担う構成素である先行詞 (correlate) を持つ。(1) の先行詞は残留詞と同じ文法的役割である直接目的語の「ペットを」である。

(3) $\overbrace{\text{太郎は}\underbrace{\text{ペットを}}_{\textbf{先行詞 (CORRELATE)}}\text{飼っている。}}^{\textbf{先行節 (ANTECEDENT)}}\overbrace{\textbf{それも}\underbrace{\text{爬虫類のペットを}}_{\textbf{残留詞 (REMNANT)}}\text{。}}^{\textbf{ソレモ節}}$

管見の限り、これまでの日本語研究ではソレモ構文への言及や分析は極めて限定的である。その状況は、他のソ系指示詞と助詞から成る接続詞（ソレガ、ソレデ等）の研究の幅広さと比べると歴然である (馬場 2010)。他言語では、用法的にソレモ構文に相当すると推察される構文には、統語論・意味論でのアプローチがある (e.g., ノルウェー語の *og det* ‘and that’(Lødrup & Haff 2011) やドイツ語の *und zwar* ‘and indeed’ (Onea & Volodina 2011))。大久保 (2020) では、これらの研究に従い、日本語のソレモ構文を意味的・語用論的観点から調査し、疑問に基づく談話構造の枠組み Question under Discussion (QUD) で分析した。

ソレモ構文は省略構文と関連性が示唆されてきたものの、明確に省略構文と主張する議論はない。本稿では、日本語のソレモ構文の統語的性質を基に、sluicing 等の節削除を含む省略構文と同様に、省略構文と見做せると主張する。本稿の構成は次の通りである。§ 2では、ソレモ構文の統語的性質を概観する。§ 3では、ソレモ構文の省略分析を議論する。§ 4では、談話構造の観点からソレモ構文を考察する。§ 5では、議論をまとめる。

2 統語的性質

ソレモ構文の統語的性質を見ていく。残留詞の**焦点性**、**連結性 (connectivity)**、**動詞残留と述語末尾の機能語 (ノダ)** の 3 つの観点からソレモ構文を特徴付ける性質を示す。

2.1　焦点性

ソレモ構文の残留詞になれる要素には情報構造的制約があり、焦点性を持つ必要がある。そのため、主題標識で標示される構成素 (4a) や、モダリティ副詞や命題外副詞などの焦点化不能副詞 (4b) は残留詞になれない。[1,2]

(4)　a.　太郎は宿題を忘れたらしい。それもあのまじめな {太郎が / * 太郎は}。

　　b.　太郎は宿題をやっている。それも {* まだ / * 恐らく / * 幸運なことに}。

ソレモ節は意外性の読みと共に解釈される。(5) の例は、映画館で映画を見ることが文脈的に見込みの度合いが低い場合（e.g., 感染症対策で多くの映画館が閉まっている）に適切に用いることができる。

(5)　昨日太郎は映画を見た。それも映画館で。

この解釈は「さえ」等の焦点小辞の効果と同様に働くと考えられる。すなわち、代替意味論に従って、残留詞は他の代替要素よりも文脈的に見込みの度合いが低いと分析できる (大久保 2020)。焦点性を持たない構成素や、文脈的な代替要素を持てない焦点化不能副詞は、残留詞になることができない。

2.2　連結性

残留詞は統語的な連結性効果を示す。残留詞は先行節の述語に対して主題役割の点で適当な格助詞を伴う。(6a) では対象を示す「を」が、(6b) では受益者を示す「に」が求められる。

(6)　a.　太郎はプレゼントを買った。それも高価なプレゼント {を / *Ø}。

　　b.　太郎はプレゼントを買った。それも花子 {に / *Ø}。

束縛原理についても連結性効果が観察される。(7a) では、再帰表現「自分」が先行節の主語「太郎の父親」に束縛される (束縛原理 A)。(7b) では、代名詞「彼」が先行節の固有名詞「太郎」と同一指標になれない (束縛原理 B)。

(7)　a.　太郎$_{i}$ の父親$_{j}$ が電話をかけた。それも自分$_{*i/j}$ の母親に。

　　b.　太郎$_{i}$ が電話をかけた。それも彼$_{*i/j}$ の母親に。

この先行節への連結性から、ソレモ節は統語移動を含むことが推察される。

2.3　動詞残留と述語末尾の機能語

ソレモ構文では、残留詞の後に動詞あるいは機能語が生起することがある。これらの要素の生起の組み合わせから、ソレモ構文は 2 種類の表層の形式を持つと認められる。

動詞残留　(8) のように、ソレモ節内で動詞が生起することを**動詞残留**と呼ぶ。

(8)　太郎はペットを飼っている。それもカメレオンを**飼っている**。

残留する動詞は、ヴォイスや時制・アスペクトを示す接辞を含めて先行節の動詞と同一形式である (9)。

(9)　a.　太郎が先生に褒められた。それも田中先生に**褒められた**。

　　b.　太郎が先生に褒められた。* それも田中先生に**褒めた**。

述語末尾の機能語　残留詞あるいは残留する動詞の後にはダあるいはノダが生起しうる。動詞が残留しない場合はダのみが生起し (10)、動詞が残留する場合はノダのみが生起し得る (11)。

(10)　太郎が先生に褒められた。それも田中先生に **{だ / * のだ}**。

(11)　太郎が先生に褒められた。それも田中先生に褒められた **{* だ / のだ}**。

[1]焦点化不能副詞 (unfocusable adverbials) とは、一定の統語的性質を満たさない一群の副詞を指す (cf. Li et al. 2012)。一般的にアスペクト副詞や焦点副詞、命題外副詞（話者指向副詞など）が該当する。これらの副詞は、分裂文のピボット位置などの焦点位置に来れないことや、語彙的に対応する *wh* 疑問詞を持たないことから、焦点化ができないと特徴付けられる。

[2]この性質は右方転移との違いと認められる。右方転移できる要素はソレモ構文と同様の焦点性の制約を受けない (i)。

(i)　本当に美味しいね。このお店の料理は。

統語的性質のまとめ　ソレモ構文は (12) のような 2 種類の表層の形式を持ちうる。以下では、動詞残留を伴わないものは NVS(Non-verb-stranding) 節と呼び、動詞残留を伴うものは VS(Verb-stranding) 節と呼ぶ。

(12)　a.　NVS 節 太郎はペットを飼っている。それもカメレオンを {**だ** / * のだ}。

　　b.　VS 節 太郎はペットを飼っている。それもカメレオンを**飼っている** {* だ / **のだ**}。

3　省略構文分析

ソレモ構文は NVS 節・VS 節ともに節削除を伴う省略構文と分析できると主張する。この提案では、両者の形式的な違いは派生の過程の差によるものであり、両者はどちらもノダ文を基底とする。NVS 節は、日本語の sluicing で提案される分析と同様に、ノダ文から前提句の主題化による分裂文化を経て前提句の削除により得られる。VS 節は、ノダ文から動詞の Fin への主要部移動と TP 削除を想定することで表層の形式を説明できる。それぞれの派生の過程は (13) で示される。以下では、どのようにして妥当な分析が得られるか議論を進める。

(13)　ソレモ節の派生分析

それも [$_{TopP}$ < [$_{FinP}$ [$_{TP}$ 太郎が t_i ペットを 飼っている] のは] > [$_{FocP}$ **研究室で**$_i$ t_{FinP} **だ**]]

NVS 節

残留詞の焦点移動
FinP 主題化 (分裂文)
FinP 削除

ノダ文

[$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ 太郎が 研究室で ペットを 飼っている] の] だ]

残留詞の焦点移動
V-to-T-to-Fin 移動 (動詞残留)
TP 削除

VS 節

それも [$_{FocP}$ **研究室で**$_i$ [$_{FinP}$ < [$_{TP}$ 太郎が [$_{VP}$ t_i ペットを t_j] t_j] > **飼っている**$_j$ **の**] **だ**]

3.1　ノダ文からの派生

まず、ソレモ構文がノダ文を基底として持つ想定の根拠として、ノダが生起できないような特定の非定形節はソレモ構文の先行節になれないことを指摘する。Takita (2009) は、「迷う」「決めかねる」といった述語が取る非定形節では、その述語末尾にコピュラのダが生起できないことを指摘している (14)。

(14)　太郎は何かを買いたいらしいが、[何を $_i$ <$_{TP}$ t_i 買おう > (* **だ**) か] 迷っている。

ソレモ構文では、これらの述語が取る補節を先行節として取ることができない (15)。[3]

(15)　a.　太郎は [e_i どこに行こうか] 迷っている。* それも次の夏休みに $_i$。

　　b.　太郎は [どの映画 $_i$ を見ようか] 迷っている。* それもどの新作映画を $_i$。

この事実から、ソレモ構文が取る節の種類には制約があり、ソレモ構文は定形節（ノダ文）を基底として持つと想定する。

3.2　NVS 節

NVS 節には sluicing の研究で提案されてきた、ノダ文から分裂文への派生を経由し前提句の削除によって得られるとする分析が適用できると主張する。すなわち、ソレモ構文は sluicing や stripping で提案される構造と同様の構造を持つ。連結性効果と随意的なコピュラの振る舞いからソレモ構文の省略構文らしさを見ていく。

[3]定形節を取る述語の補節は、ソレモ構文の先行節になることができる (ii)。

(ii)　太郎は [花子が e_i 旅行に行った (のだ) と] 思っている。それも北海道に $_i$。

連結性効果　‘sluicing 的’ 構文では残留詞は格標識を伴う場合 (16a) と伴わない場合 (16b) がある。

(16)　a.　太郎は昨日、帰り道で誰かに会ったらしいが、僕は**誰に**だか分からない。

　　b.　太郎は昨日、帰り道で誰かに会ったらしいが、僕は**誰**だか分からない。

格標識の有無は、先行節との連結性を示すと見做され、連結性効果は統語構造の違いを反映する (FukayaHoji 1999, Fukaya 2018)。支持的証拠は分裂文のピボット位置での格標識の有無が示す違いから得られる。格標識を伴う場合は省略構文で期待されるように下接の条件の効果を示し、複雑名詞句内の構成素との同一指示の関係は築けない (17a)。一方、格標識を伴わない場合はそのような効果を示さない (17b)。(17a) の非文法性は統語的移動が関与するならば説明が付く。

(17)　a.　分裂文 (格標識を伴う)

　　*[$_{CP}$ [$_{NP}$ e_i お金を盗んだ泥棒] が昨日逮捕されたの] は **その銀行から** $_i$ だ。

　　b.　疑似分裂文 (格標識を伴わない)

　　[$_{CP}$ [$_{NP}$ e_i お金を盗んだ泥棒] が昨日逮捕されたの] は **その銀行** $_i$ だ。　　(cf. Saito 2004:22)

ソレモ構文は格標識を伴う残留詞を持つ。ソレモ構文が移動を伴う省略構文ならば、分裂文と同様の制約を持つはずである。この予測通り、ソレモ構文は複雑名詞句内の構成素との同一指示に関して分裂文と同様に振る舞う。(18) では、ソレモ節では複雑名詞句内の事物あるいは事象の修飾する残留詞は生起できないことが示される。

(18)　a.　[$_{CP}$ [$_{NP}$ 図書館 $_i$ から借りた本] を郵送で返却した]。* それも沖縄の図書館 $_i$ から。

　　b.　[$_{CP}$ [$_{NP}$ e_i お金を盗んだ泥棒] が昨日逮捕された]。* それもその銀行から $_i$。

随意的なダの生起　日本語の省略構文では、残留詞の後に随意的にコピュラ「だ」が生起することがある (19)。英語の sluicing で想定される残留詞の移動と TP 削除の分析 (20) では、このコピュラの生起を説明することができない。

(19)　<u>**Sluicing**</u> 太郎が何かを買ったらしいが、僕は何を (**だ**) か分からない。

(20)　<u>**Genuine sluicing 分析**</u> [$_{CP}$ XP_i < [$_{TP}$ t_i] >　]

派生分析　省略構文でのダの生起を説明するために、日本語省略構文はノダ分・分裂文から派生すると想定する分析が提案されてきた (Nishiyama et al. 1996など)。さらに、Hiraiwa & Ishihara (2012) は Split-CP の想定下で省略構文をノダ文から派生する提案をしている。この分析では、ノを Fin 主要部、ダを Foc 主要部と見做し、ノダ文 (in-situ focus construction) を (21) のように表す。

(21)　<u>**ノダ文**</u> [$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ 太郎が爬虫類のペットを飼っている] の] だ]

分裂文は、ノダ文を基底とし、残留詞の焦点移動 (22) と FinP の主題化 (TopP 指定部への移動)(23) により得られる。「は」は主題化した構成素に付与する。

(22)　<u>**残留詞の焦点移動**</u> [$_{FocP}$ **爬虫類のペットを** $_{\mathbf{i}}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ 太郎が $\boldsymbol{t_i}$ 飼っている] の] だ]

(23)　<u>**分裂文**</u> [$_{TopP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ **太郎が** t_i **飼っている] のは**] [$_{FocP}$ 爬虫類のペットを $_i$ $\boldsymbol{t_{FinP}}$ だ]]

sluicing は、分裂文の前提句が削除されることで、その表層の構造が説明される (24)。

(24)　<u>**Sluicing**</u> 太郎はペットを飼っているが、僕は [$_{ForceP}$ [$_{TopP}$ < [$_{FinP}$ [$_{TP}$ 太郎が t_i 飼っている] のは] > [$_{FocP}$ 何のペットを $_i$ t_{FinP} だ]] か] 知らない。

以上の分析は、ソレモ構文でも成立すると主張する。Hiraiwa & Ishihara (2012) の提案に従い、NVS 節はノダ文から分裂文を経て、FinP の削除で表層構造が得られる。NVS 節は (25) の構造を持つ。

(25)　<u>**NVS 節**</u> **それも** [$_{TopP}$ < [$_{FinP}$ [$_{TP}$ 太郎が t_i 飼っている] のは] > [$_{FocP}$ **爬虫類のペットを** $_i$ t_{FinP} **だ**]]

前提句で示される内容は情報構造的に given であり、主題化されている。そのため、主題句削除の要件は冗長さにより認可されると想定できる。NVS 節では、動詞と Fin 主要部ノが削除対象の範囲内にあるため、ソレモ節には残留詞の他にコピュラのダのみが生起し得る。

3.3 VS 節

可能な分析　VS 節は、NVS 節と異なり動詞が生起するため、分裂文への派生を含む分析では説明できない。そこで、断片的表現が動詞と共に現れる構文の分析に関する二つの主要な分析案を検討する。一つは、項省略や null *pro* の想定によって節内の情報構造的に顕著な構成素と動詞以外の構成素が全て音形を持たなくなるという分析である。もう一つは、動詞の主要部移動と機能句主要部 (T, C) の補部の削除によって、補部内の構成素が発音されなくなるという分析である。

先行節と省略対象節の同一性　分析にあたって、ソレモ構文では先行節と省略対象節が全く同一の事象を示すという性質から、省略構文の議論の援用に関して重要な事実が 2 点ある。一つ目は、ソレモ構文では**先行節と省略を含む節の間に並列的な構造が持てない**ことである。省略現象を対象とした議論の多くは、先行節と省略対象節との間に対比・累加の読みが得られる並列構造の例を基に発展してきている。一方で、大久保 (2020) で示したように、ソレモ節は累加標識「も」で示されるような先行節の事象とは別の事象について述べることができない (26)。そのため、先行研究の議論がソレモ構文の分析に直接的に援用できるわけではないことに注意されたい。

(26)　太郎は毎日カモミールティーを飲む。* それもミントティーも（飲む）。
　　(意図した命題的意味: 太郎は毎日カモミールティーを飲み、かつ、ミントティーを飲む。)

２つ目は**ソレモ節の解釈は先行節の付加詞の解釈を常に含む**ことである。(27) では、ソレモ節は付加詞を含んだ先行節の事象 (i.e., 太郎がゆっくりとお茶を飲んだこと) に関して、その詳細についての情報を与える。よって、ソレモ節では付加詞が何らかの形で音形を持たなくなる操作が関与するはずである。検討する二つの分析案はこの付加詞が発音されないことに関して異なる統語操作で説明する。

(27)　太郎がゆっくりとお茶を飲んだ。**それも** {高級そうな湯呑で / ルイボスティーを} 飲んだ。

項省略分析と null pro 分析　項省略分析または null *pro* 分析では、焦点化された構成素以外が発音されなくなることで、表層の形式を説明する。ソレモ構文が項省略、付加詞省略を含むならば、(27) の例は、(28a–28b) のような構造を取ることになる。

(28)　a.　**それも**< 太郎が >< ゆっくりと >高級そうな湯呑で< お茶を >飲んだ。
　　b.　**それも**< 太郎が >< ゆっくりと >ルイボスティーを飲んだ。

省略構文の研究では、付加詞が省略の対象になる条件は項省略とは異なると理解されている。VP 省略に関連する議論では、付加詞が発音されなくなるには、特定の条件を満たす必要がある。例えば、Funakoshi (2016) によると、VP 内の構成素が顕在的であるときは、付加詞は含む解釈は得られない。(29a) は付加詞を含まない解釈が優勢だが、一部の話者は付加詞を含む解釈も容認する。一方で、同節構成素が顕在的な文である (29b) では、付加詞を含む解釈は得られず、付加詞の省略があるとは想定できない。

(29)　太郎は丁寧に車を洗った。
　　a.　花子も Δ 洗った。(可能な解釈: 「花子も**車を**洗った。」「花子も**丁寧に車を**洗った。」)
　　b.　花子も Δ **車を**洗った。(可能な解釈: 「花子も**車を**洗った。」)　　（cf. Funakoshi 2016)

このような観察事実から、日本語では付加詞の省略には特定の条件が求められ、常に付加詞のみが自由に脱落できるわけではない (Oku 1998)。よって、この分析が正しいとするには、ソレモ節内が付加詞省略を許す環境であることを示す必要がある。

動詞残留 + 句省略分析　次に、動詞残留と機能句主要部の補部が削除対象となる分析を見ていく。ソレモ構文では主語も省略の対象となるので、VP 省略ではなく TP 省略が想定される。TP 省略では、付加詞を含む解釈は sluicing と同様に、付加詞を含んだ節の削除によって説明される。動詞残留に関しては、動詞が V から主要部移動で C まで繰り上がる string-vacuous な移動を想定する。動詞の主要部移動の妥当性は、累加・並列環境、verb-echo answer (VEA) 等の現象を基に提案されている (Koizumi 2000, Sato & Maeda 2021な

ど)。[4]

動詞残留と TP 削除によって VS 節が得られるかを考える。§ 3.1で見たように、ソレモ構文はノダ文を基底として持つ。Split-CP の想定下で、動詞は Fin まで上昇する。ソレモ構文においては、これらの統語操作に加えて焦点化された構成素が FocP 指定部に移動すると分析する。結果として、VS 節は (30) の構造を持つ。残留詞と動詞が顕在的であり、ノダが随意的に生起する。

(30) VS 節 **それも** [$_{FocP}$ **爬虫類のペットを** $_i$ [$_{FinP}$ < [$_{TP}$ 太郎が t_i t_j] > **飼っている** $_j$ **の**] **だ**]

ソレモ構文の認可要件　ソレモ節での TP 削除はどのようにして統語的に認可されるだろうか。Lobeck (1995) やMerchant (2001) の議論では、T や C などの機能句主要部に補部の省略を認可する何らかの素性 (E 素性) がある場合に、補部が削除される。sluicing では残留詞が [wh] 素性を持つ疑問節であること、stripping では省略対象の節が先行節と並列環境であること ([conj]) が E 素性と結びつけられる (Merchant 2003)。しかし、ソレモ節は wh 句を残留詞として持てず (31)、先行節と並列関係になれないため (26)、これらの条件では説明できない。

(31) * 太郎はペットを飼っているらしいけど、**それも** {何を / 何のペットを / いつから} だか分からない。

よって、独自の認可の要件を立てる必要がある。形式的な面では、§ 3.1で見たように、ソレモ構文はノダの生起が可能な節に限定されるため、節の種類で指定があると想定される。削除される TP を補部として持つ Fin が求めうる条件が考えられる。これまでに明らかにしたソレモ節の統語的性質から、省略を認可する条件としては、補部が定形節であることや、動詞が Fin まで上昇することが、TP 削除の要因と関連付けられると考えられるだろう。残留詞に関しては、ソレモ構文は義務的な非 wh 句の焦点移動を要求する点で特徴付けられる。これらの想定から、ノダ文からの派生で VS 節を得ることができる可能性がある。

3.4　省略構文分析のまとめ

§ 3では、ソレモ構文を省略構文として分析した。先に§ 2で触れたソレモ構文の特徴は、省略構文と見做すことで説明できる。意外性の読みは、焦点移動により FocP 指定部にあることの帰結と考えられる。連結性は、残留詞が通常の節と同様に格付与されるために、先行節の述語に対して適切な格助詞を伴うと説明できる。

さらに、議論では動詞残留を含まない NVS 節と動詞残留を含む VS 節の 2 種類のソレモ構文の形式について、それぞれの分析を議論した。NVS 節は、ノダ文から分裂文への派生と前提句の削除で説明できる。VS 節は、項省略・付加詞省略分析と動詞残留を含む TP 削除分析を検討した。議論の詳細を詰める必要があるが、後者の分析は、NVS 節と同じ節削除の操作によってソレモ節の解釈を説明できる点、ソレモ構文の先行節への定性の制約を省略の認可要件として統語的に組み入れて説明できる点で優れていると思われる。

4　談話構造的分析

意味・語用論的に省略構文の認可を論じる研究では、ソレモ構文が他の省略構文どう異なるかを考察する。疑問の意味論に基づく談話構造の分析では、主張から生じる疑問の性質が論じられており (AnderBois 2011, Onea 2016など)、sluicing の認可を談話的に説明しようとする試みがある。これらの分析では、談話で (32) の主張が与えられることで、(33) のような疑問を問うことができる。

(32) 太郎が本を買った。

(33) 事象に関する疑問 太郎は {いつ / どこで / 何のために} 本を買ったか？
　　事物に関する疑問 太郎はどんな本を買ったか？

これらの主張から生じる疑問という観点から省略構文を比べると、sluicing とソレモ構文は、同様に先行節の主張から生じる疑問に対処するが、その対処の仕方が異なると見做すことができる。(34) のような sluicing では、先行節から生じる疑問に何らかの言及をするが、その発話によって疑問への答えは与えられない。

(34) Sluicing 太郎は本を買った (ようだ)。だけど、僕は {どこでだか / 何の本をだか} 知らない。

[4]ただし、それらの分析への反証の議論もある (Fukui & Sakai 2003など)。

一方で、(35) のようなソレモ構文は、先行節から生じる疑問へ答えを与えると分析できる (大久保 2020)。主張から生じる疑問に関与する点で、ソレモ構文は意味的にも節削除を含む省略構文と共通する点があると考えられる。

(35) ソレモ構文 太郎は本を買った。それも {古本屋で / 料理の本を}。

5 まとめ

本稿では、ソレモ構文の統語的性質を残留詞の焦点性、連結性、述語末尾の機能語の観点から特徴付けられると指摘し、ソレモ構文に省略構文の分析が適用できると提案した。2 種類の形式はどちらもノダ文を基底に持つが、その派生の過程が異なる。どちらの分析でも残留詞は FocP 指定部に移動する。その上で、NVS 節は分裂文への派生と前提句の削除、VS 節は動詞の Fin への残留と TP 削除を含む。最後に、談話要因による認可の観点からソレモ構文と sluicing を比較し、主張から生じる疑問への対処の仕方の違いで特徴付けられることを示した。

参考文献

AnderBois, S. (2011) Issues and alternatives. Santa Cruz, CA: UC Santa Cruz dissertation.

Fukaya, T. (2018) Japanese. In *The Oxford Handbook of Ellipsis*, Oxford: Oxford University Press.

Fukaya, T. & H. Hoji (1999) Stripping and sluicing in Japanese and some implications. In *Proceedings of the WCCFL 22*, 145–158.

Fukui, N. & H. Sakai. (2003) The visibility guideline for functional categories: Verb raising in Japanese and related issues. *Lingua* 113, 321–375.

Funakoshi, K. (2016) Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 25(2), 113–142.

Hiraiwa, K. & S. Ishihara. (2012) Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15(2). 142–180.

Koizumi, M. (2000) String vacuous overt verb raising. *Journal of East Asian Linguistics* 9. 227–285.

Li, Y. and R. Shields and V. Lin (2012) Wh-movement and the syntax of sluicing, *NLLT* 30(1): 217–260.

Lobeck, A. (1995) *Ellipsis: Functinoal heads, licensing, and identification.* Oxford: Oxford University Press.

Lødrup, H. & M. H. Haff (2011) Another overt surface anaphor: Norwegian 'and that'. In *Proceedings of the BLS 37*, 257–271.

Nishiyama, K, J. Whitman & E-Y. Yi. (1996) Syntactic movement of overt wh-phrases in Japanese and Korean. *Japanese/korean linguistics* 5, 337–351. Stanford, CA: CSLI.

Merchant, J. (2001) *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis.* New York: Oxford University Press.

Merchant, J. (2003) Remarks on stripping. Unpublished ms., University of Chicago.

Oku, S. (1998) A theory of selection and reconstruction in the Minimalist Program: University of Connecticut dissertation.

Onea, E. (2016) *Potential Questions at the Semantics-Pragmatics Interface.* Leiden: Brill.

Onea, E. & A. Volodina (2011) Between specification and explanation: About a German discourse particle. *International Review of Pragmatics* 3(1): 3–32.

Saito, M. (2004) Ellipsis and pronominal reference in Japanese clefts. *Nanzan Linguistics* 1. 21–50.

Sato, Y. & Maeda, M. (2021) Syntactic head movement in Japanese: Evidence from verb-echo answers and negative scope reversal. *Linguistic Inquiry* 52. 359–376.

Takita, K. (2009) 'Genuine' sluicing in Japanese. In *Proceedings from the 45th Annual Meeting of the CLS* 1, 577–593.

大久保弥. (2020) 「追随的疑問における伴立: 「それも」の談話構造的分析」 日本言語学会第 160 回大会. 2020 年 6 月 20 日–21 日.

馬場俊臣 (2010) 『現代日本語接続詞研究: 文献目録・概要及び研究概観』 おうふう.